

されている。三従説は五障説に比すれば、一貫して超克が可能な女性差別観念であったと思われる。

大乘諸経典では、諸法空・一乗(法華経等)・如来蔵(『勝鬘経』)等の思想に基づいて、男女の差別を超えた普遍的成仏を提示しようとする流れが生じる。この中で五障・三従説も超克され、最初期の仏典同様、普遍的成仏が開けてくるものと思われる。その極まった形は徹底した一乗思想を説く法華経にあると言える。法華思想は智顗・湛然・最澄等を経て展開され、日蓮に至って五障・三従を超えた女人即身成仏が定まるものと思われる。

日蓮の朝鮮仏教認識

福士 慈稔

日蓮聖人の著作書簡類(『昭和定本日蓮聖人遺文』全四巻)の中に「仏法自百済国渡」として百済から仏教が伝わったとする記載は、四一歳著作の『教機持国鈔』から五八歳の『中興入道御消息』まで、著作七、書簡十二にみられる。著作と書簡の区別は判断が難しいものもあるが、著作は日蓮聖人の内証法門の開示、法華経流布、諸宗対破、または門徒教育の論拠となるものであり、書簡はそれらを論拠として記されたものであることを考えれば、日蓮聖人の書簡は、日蓮聖人の書簡に関する先行研究を鑑みれば、書簡は教学書とも捉えるべきものである。「仏法自百済国渡」という記事が書簡にも見られるということは、「仏法自百済国渡」ということを自らが認識し、その認識を信徒にも共有させようとする意図が窺われるものである。

尚、それ等の資料から窺われることは次の点である。

一、日本に於ける仏教伝来年次は、五五二年十月十三日である。

二、百済に於ける仏教伝来年次は、四五〇年頃である。

三、百済から初伝時に法華経も伝わったが、日本に於ける法華経流布の端緒は聖徳太子である。

日蓮聖人の著作書簡類(九部・含『二代五時継図』)にみられる朝鮮三国僧は、百済僧では観勒・慧観、高句麗僧では恵慈・恵准、新羅僧では智鳳・審祥・神昉の名がみられる。これ等の引用は章疏の引用ではなく、全て名を挙げているだけであるが、その意図するところは、宗派・教学の伝来である。百済の観勒が三論・成実を伝えたとし、また恵観も日本で三論宗を弘めたとする。新羅僧の智鳳は法相宗を、審祥は華嚴宗を伝え、それぞれが日本初伝であるとする。これは当時の日本仏教界の認識であり、日蓮聖人は当時の日本仏教界の認識を正しく承けていたに過ぎないのであるが、注目されるのは『曾谷入道殿許御書』『妙密上人御消息』『本尊問答抄』のような信徒への書簡にもみられることである。

日蓮聖人の朝鮮章疏の引用は、『二代聖教大意』(太賢一回)、『万法一如鈔』(元曉一回)、『注法華経』(元曉三回、義寂二回、太賢三回)にみられるが、元曉の場合は最澄『依憑天台集』『守護国界章』、義寂の場合は源信『二乗要決』からの孫引きであり、日蓮聖人が独自に手にした可能性があるのは太賢章疏(『梵網経古迹記』)だけである。日蓮聖人に朝鮮章疏の重用度は窺えない。

次に、『開目抄』『高橋入道殿御返事』『兄弟鈔』『報恩抄』『四条金吾殿御返事』によると、次のような認識が窺える。

一、日本と朝鮮三国との関係については、仁徳天皇代には三国は日本に朝貢するような関係であった。また百済は欽明天皇代に朝貢の際に仏教を伝えたのである。

二、朝鮮三国内の仏教事情については、法雲の影響で法華經信仰が浸透していなかった。

更に、『法門可被申様之事』『金吾殿御返事』『大果報御書』『別当御房御返事』『撰時抄』によると、

一、高麗の仏教事情については、禪宗と念仏宗の国になってしまっている。

二、高麗が蒙古の属国となった理由については、禪宗と念仏宗の国になったために、高麗国内の守護善神がいなくなったためである。

日蓮聖人の災害及び国難は、為政者及び国民が法華經を信仰していないために起こるとする立場からの見解である。実際に『法門可被申様之事』には高麗仏教を日本仏教の先師として認めているのである。(平成二二―二四年度科学研究費補助金基盤研究(C)「日本仏教各宗の新羅・高麗・李朝仏教認識に関する研究」による研究成果の一部)

日興とその門弟の往来に関する一考察

本間 俊文

日蓮の本弟子の一人で、日蓮滅後日興門流を形成した白蓮阿闍梨日興(一二四六―一三三三)には多数の自筆文書が伝来し

ており、その数は日蓮の直弟の中でも群を抜いている。日興文書の存在は、日蓮教団初期の動向や布教活動の様子、さらには鎌倉期における生活状況や文化の一端を紐解く貴重な文献史料であるといえよう。本発表では日興文書研究の一視点として、日興とその門弟の往来に関する記述に着目する。そして往来を伝える記述から、日興在世中にはどのような人の往来があり、その往来が日興らの布教活動とどのように結びつき、日興門流の教線拡張へとつながっていったかについて少しく考察したい。なお、本考察では日興文書に加え、日興在世中の筆と判断される日興の門弟の文書も考察対象とする。また日興文書・門弟文書には目的の異なった様々な往来が確認できるが、その中でも特に布教活動と諫曉活動を目的とした往来について考察する。

まず布教活動に関する往来についてである。日興在世中には門弟諸師が各地に赴いて教化活動を展開している様子が窺える。それは血縁関係者の本貫地という縁による日目の奥州教化や、日華・日郷・日妙の佐渡派遣による教化活動、そして日郷による安房教化などが挙げられる。このような各地における門弟の布教によって、日興門流の教線は着実に伸張り、日興門流の二大拠点である上野大石寺・重須本門寺のあった駿河からは遠く離れた奥州や佐渡にも多数の弟子檀越を獲得するに至った。その結果、毎年十月頃になると奥州信徒による大石寺登詣が実施されるようになり、地方における布教が功を奏して檀越による一つの慣習化した信仰活動を生み出したことが確認できる。また大石寺に登詣した奥州信徒は大石寺のみならず、当然